

本多静六通信

第28号

発行
本多静六博士会
を顕彰する

本多静六博士の生誕の地 久喜市

博士の功績を全国へ広げるために

久喜市長 梅田修一

令和という新たな時代を迎えた今年度、久喜市は合併から十年目の節目の年となりました。本市では様々な記念行事を市民の皆様と共に実施する中で、これまでの歩みを振り返るとともに、市内各地区の市民の皆様と行政が一体となり「オール久喜」の体制でまちを活性化し、未来を見据えたまちづくりを推進してまいりたいと考えているところです。

また、私は九つの基本方針に基づいた政策に取り組んでいるところですが、その一つとして「シテイセールスを推進し、久喜市の魅力を世界に発信」を掲げています。本市の名誉市民である本多静六博士は、日本の公園の父、また、日本初の林学博士であり、全国に誇

る郷土の偉人です。博士の生誕の地である本市といたしましては、博士の残された多くの偉業や功績を市内外に積極的に発信してまいりたいと考えています。

■市の顕彰事業

本市では、本多静六博士の業績を称えるとともに、広くまた後世にその功績を伝えていくために、「本多静六博士顕彰事業」を実施しているところです。

顕彰事業といたしましては、「本多静六博士を顕彰する会」の皆様のご尽力により、博士の業績と人柄を広く知らしめるための情報発信として、この「本多静六通信」を発行していただいております。今号で第二十八号となりました。

また、博士が手がけたゆかりの地を訪ねる、「本多静六博士ゆかりの地訪問事業」につきましても、毎年顕彰する会との共催により実施しております。令和元年度は、十一月七日、秋晴れの下、二十四

人の市民の皆様にご参加いただき、明治神宮の森や日比谷公園を訪問いたしました。訪問先では、施設管理者からの丁寧な説明をいただき、参加者の皆様にも大変ご好評をいただいたところです。

埼玉県との事業でございますが、博士の精神を受け継ぎ、緑と共生する社会づくりに貢献した方を表彰する「本多静六賞」につきまして、本市と共催をしております。私も、第十二回となる今年度の表彰式に出席をさせていただきます。

た。

平成二十五年に開館した本多静六記念館は、本多静六博士を顕彰する会の皆様の御協力をいただきながら、全国から多くの方々にご来館をいただいております。記念館で展示をしている資料は、開館前に博士のご遺族である本多家や、生家である折原家より市へご寄贈いただいているもので、博士本人に関わる資料が中心でした。その後、平成二十七年には本多家より追加で資料をご寄贈いただきました。これらの資料は、博士の妻である銚子や養父である晋関係を中心とした文書資料、博士が収集した日本で一番大きな桑の木の標本など、貴重な資料ばかりです。市では、郷土資料館の学芸員の手に



本多静六博士ゆかりの地訪問
日比谷公園「首かけイチョウ」前

より追加寄贈資料の整理を進めてきましたが、これらの資料を多くの皆様にご覧いただくため、平成三十年度に記念館の展示の一部を改修いたしました。これらの新たな資料の展示により、博士の魅力を発信し、より深く博士を知っていただける施設へと進化をすることができました。この改修について新聞各社においても取り上げていただいたところであり、改修を機に改めて多くの方々に記念館の存在を周知することができたと考えております。

また、記念館の改修にあわせまして、市内の小学生を対象に「郷土の偉人本多静六博士の偉業・生き方から地域の魅力を再発見事業」を実施いたしました。この事業は、博士の生き方や考え方についての授業を行うなどの活動が認められ、第十回本多静六賞の特別賞を受賞している三箇小学校の六年生が講師となり、市内小学校の四・六年生を集め、博士の偉業を市全域に発信するため、発表会を実施したものです。発表会後には、博士の偉業について更に理解を深めていただくため、改修した本多静六記念館の見学にあわせてディスカッションを実施し、参加された小学生



「郷土の偉人本多静六博士の偉業・生き方から地域の魅力を再発見事業」児童による発表

の皆様には、博士に関する知識を一層深め、自らが住む地域の魅力を再発見していただくことにつながったものと考えております。

令和元年度には、関係自治体などにご協力をいただき、記念館入り口に掲示している博士ゆかりの地のポスターを、最新のポスターへ展示替えを行いました。今後も多くの方に博士の業績を知っていただくため、記念館の充実に努めてまいります。

また、本市では、小学生を対象とした副読本「日本の公園の父本多静六」を発行しております。本



「郷土の偉人本多静六博士の偉業・生き方から地域の魅力を再発見事業」本多静六記念館見学

の中では、博士が日本各地の公園設計に携わったことや、自身の苦学の経験から、所有する山林を奨学金制度の創設を条件に寄附したことなどを分かりやすく紹介しています。この本を読んで博士の偉業を知った子どもたちの中から、将来、第二、第三の本多静六が誕生することを期待しているところ

です。

また、博士の生誕地に近い国道百二十二号沿い、台地内「道のオアシス」の一角に、「本多静六博士生誕地記念園」があります。園内には、博士の胸像が設置されて

いるほか、博士ゆかりのイチヨウ（日比谷公園の「首かけイチヨウ」を接ぎ木したもの）やユリノキが植えられております。資産家、慈善事業家としても広く知られる博士は、秩父地域の振興と奨学金の創設を条件に、秩父市（旧大滝村）の山林を埼玉県に寄附してありますが、胸像の台座にはその中津川県有林産の石が使われています。

ほかにも、市内には三箇小学校、菖蒲総合支所正面玄関前にも博士の胸像が設置されており、市民の皆様が親しまれています。

そのほか、菖蒲南部産業団地三崎の森公園内に、「本多静六博士の森」が整備されております。この森は、平成二十年度に、埼玉県により開始された「本多静六博士の森づくり」の一環として整備され、博士が明治神宮の森を造成した時の、自然を生かした森づくりの考え方を取り入れて、コナラやクヌギなどの樹木を植栽し整備されていきます。この森につきましては、埼玉県、市、本多静六博士を顕彰する会が役割分担に関して協定を締結し、顕彰する会により、草刈りや樹木の管理など、森林の保全活動を行っていただいております。

■ 渋沢栄一翁と本多静六博士

埼玉県が誇る偉人であり、「日本資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一翁が、令和六年度に発行される一万円の新紙幣の肖像となることが決まりました。また、令和三年のNHK大河ドラマの主人公が渋沢翁であることが発表されるなど、渋沢翁の注目度が急上昇しています。皆様もご存じのとおり、渋沢翁と本多静六博士には繋がりがあることから、すでに令和元年六月号の『広報くさ』の「久喜歴史だより」において、両者の繋がりに関する記事を掲載しました。渋沢翁に注目が集まることは、博士をより多くの方々に知っていただけの絶好の機会でもあることから、引き続き情報発信をしてまいりたいと考えています。

■ 日比谷公園とスポーツ

日本初の西洋風の近代的な公園である日比谷公園を設計したことをきっかけとして、本多静六博士は「日本の公園の父」と呼ばれることになりましたが、日比谷公園設計に際して園内に運動場を設けています。当時、スポーツをする習慣が日本にはまだまだ根付いていなかったことなどから、運動場設

置に対して批判的意見を持つ方もいたようです。しかし、東京でも数少ない運動場であったことから、先進的にスポーツに取り組んでいた大学や高等学校などのスポーツクラブにとって、日比谷公園の運動場は絶好の練習や試合の場となっていたそうです。東京2020オリンピック・パラリンピックが間近に迫った今日、日本におけるスポーツの普及は改めて触れるまでもありませんが、その普及には博士の公園設計が一定の役割を果たしたことになります。市内にも令和二年七月八日に聖火リレーが通ることになりましたが、

博士の業績にも思いを巡らせながら聖火リレーを迎えたいと考えています。

また、博士はその後数々の公園の設計に携わっていきますが、その際の設計思想として「独立自強」と「健康第一主義」があります。自立した生活を得るためには何よりも心身の健康が大切であるとの考え方です。そのため、公園を設計するにあたっては、運動区などを必ず設ける必要があると説いていました。本市では「健康・スポーツ都市宣言」を行う予定ですが、本市出身の博士が、本市の目指す

宣言の内容にも通じる考えをすでに持っていたことは、市長として誇りに思っているところです。

■ (仮称) 本多静六記念 市民の森・緑の公園

久喜市は、平成二十二年三月二十三日に、旧久喜市、旧菖蒲町、旧栗橋町、旧鷲宮町の合併により誕生しました。そのため、現在市内には、旧一市三町で保有していた三箇所の清掃センターがあります。これらの清掃センターにつきましては、建設から二十五年以上が経過しており、最も古いもので、建設から四十年以上が経過していることから、これら施設の老朽化対策が、本市の喫緊の課題となっています。

このような中、平成二十六年三月に菖蒲地区三箇地域の方々から、本市出身の偉人で「日本の公園の父」と称される本多静六博士を記念した公園の整備と、菖蒲清掃センターの建て替えなどに関する要望をいただきました。

本市では、これらの要望に対しまして、関係者の皆様と意見交換を重ね、菖蒲清掃センターの場所を重ね、市内三箇所のごみ処理施設の機能を一箇所に集約した新たなご

み処理施設を建設し、併せて、その隣接地に緑豊かで市民の憩いの場となるような「(仮称) 本多静六記念 市民の森・緑の公園」を一体的に整備することといたしました。

公園の整備に向けましては、公園内に配置する各施設に関する基本的な方針と、その内容を示すための基本計画を策定するため、平成二十七年十月に公募による市民や、地域の代表者、学識経験者を有する者などの十五名で構成した「久喜市(仮称) 本多静六記念 市民の森・緑の公園整備検討委員会」を設置しました。

検討委員会では、まず、公園計画地をはじめ、博士が公園の改修に携わった「清水公園」や、平成二十八年度に全面供用を開始した「まつぶし緑の丘公園」などの視察研修を行いまして、委員の皆様にご協力から造る公園のイメージを養っていただきました。また、ワークショップの手法による自由な意見交換などを行いました。

検討委員会の開催は、当初六回の予定でしたが、新たなごみ処理施設への車両の進入路や、レイアウトの検討が進んできたことから、二回を追加した計八回の

検討委員会を開催し、熱心な検討や活発な議論を重ねていただき、平成二十九年十月十三日に「久喜市（仮称）本多静六記念 市民の森・緑の公園基本計画（案）」の答申をいただきました。

それから、答申をいただいた基本計画（案）の内容について、市の関係課や、久喜宮代衛生組合などに意見を伺い、若干の文言等の修正を行いました。平成二十九年十二月二十五日に「久喜市（仮称）本多静六記念 市民の森・緑の公園基本計画」を策定しました。

この基本計画では、博士の遺志を受け継ぎ、緑豊かで市民の憩いの場となるような公園を目指すため、公園整備の基本理念を以下の八つに整理しました。

- 一 本多静六博士の公園哲学・理念を取り入れ、具現化する
- 二 本多静六博士を体験を通じて知り、その思想が引き継がれる公園をつくる
- 三 久喜市の地域文化を表現した公園をつくる
- 四 子どもからお年寄りまで、気軽に楽しむことができる公園をつくる（自然・レクリエーション・イベント）
- 五 市民との協働による公園・森

づくりを行い、何世代にもわたり、愛される公園をつくる（献木・維持管理等）

- 六 周辺の公園などと機能を連携させた公園をつくる
- 七 公園整備を契機として、地域のまちおこしに発展させる
- 八 地域の防災に寄与する公園をつくる

この計画の中では、博士の公園の設計における思想を取り入れた設備計画を設定しております。

博士の公園における設計思想として、前章でも述べましたように「独立自強」があげられます。

「独立自強」とは、「親譲りの財産などを当てにせず、人の世話にもならず、各々が自分で働いて生きていくこと」であり、そのためには、身体が丈夫でなければなりません。その健康第一主義の実現には、十分に日光を浴び、新鮮な空気を呼吸し、新鮮な食物を食べることが大切であり、それらを可能にするのが「公園」であると述べております。

また、「欧米では、公園の設備がその地方の文化の尺度と言われている。都市生活者にとって、心身を休養し健康を回復するために、保養所としての公園が必要である」



久喜市（仮称）本多静六記念 市民の森・緑の公園基本計画 鳥瞰図

と述べています。

博士がかかわった公園の多くは、その土地の自然の地勢、気候、風土、歴史などに配慮して、付近の山水辺などの風景を有効に活用して景観の向上を図り、民衆の健康保持に適した場所となるように努めています。一人の人間が幸せな生涯を生きるには、何よりも健康であることとの考えに立ち、民衆の健康増進こそが、博士の公園設置の最大目的であったと思われる。

また、新たなごみ処理施設とこの公園を県内外から多くの方々に利用していただけるような魅力ある施設とするため、庁内の関連する部署や公募の職員の十七名で構成した「久喜市新たなごみ処理施設及び（仮称）本多静六記念 市民の森・緑の公園一体整備プロジェクトチーム」を平成三十年七月に新たに設置し、現在、様々な視点から検討を進めております。

今後、プロジェクトチームにおいて検討結果を取りまとめ、市が集客施設に関する基本的方針を決定する予定となっております。

この公園の整備にあたっては、基本計画や基本的方針を基にレイアウトの見直しなどを行い、新た

なごみ処理施設の稼動に合わせまして、供用を開始できるよう進めてまいります。

■結びに

本市では様々な顕彰事業を行っているところですが、本多静六博士の生誕の地といたしまして、（仮称）本多静六記念 市民の森・緑の公園の整備をはじめ、今後も本多静六博士を顕彰する会の皆様と連携しながら、博士の功績を全国に広めるための事業をより一層充実してまいりたいと考えております。

本通信の発行にあたり、ご尽力いただきました本多静六博士を顕彰する会の柴崎会長をはじめ、会員の皆様や関係各位に深く感謝いたしますとともに、益々のご発展を心からお祈り申し上げます。

第十二回本多静六賞 受賞者の紹介

埼玉県農林部森づくり課 主任 谷 島 健 悦

一 第十二回（平成三十年度）本多静六賞について

県では、本県出身で日本最初の林学博士となった本多静六博士の精神を受け継ぎ、緑と共生する社会づくりに貢献した個人・団体を、平成十九年度から表彰しています。

第十二回本多静六賞については、計十四件（個人九件、団体五件）の応募があり、秩父神社宮司 藪田 稔氏が受賞されましたので御紹介いたします。



第十二回本多静六賞受賞者 藪田 稔 氏

二 藪田稔氏の経歴と功績

○経歴

藪田氏は、秩父神社宮司、京都大学名誉教授、NPO法人社叢（し

やそう）学会理事長などの多くの要職を務められております。

○功績

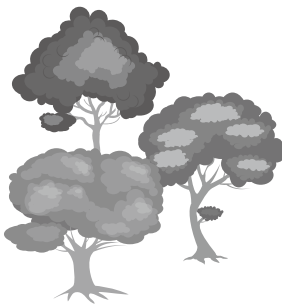
神社の境内や神殿、参道及び拝所を囲むように維持される、「鎮守の森」の研究を推進し、森とともに生きる日本文化の象徴として、鎮守の森を国内外に発信されています。

また、秩父神社境内の「ははその社（もり）」を秩父市街地に残る貴重な鎮守の森として、長年にわたり維持保全に努められています。



秩父神社と「ははその社」

その他にも、藪田氏が理事長を務めるNPO法人社叢学会では、全国の鎮守の森の保全を行うと



もに、地域社会における鎮守の森を核とした祭りや伝統芸能の復活による地域おこし等に貢献されています。

その活動の一環として、東北の被災地域において、鎮守の森の再建や、地域活性化のため復興記念植樹を行い、森とともに地域を活性化させる活動に尽力されています。

三 本多静六賞表彰式

表彰式は、令和元年七月八日に知事公館で行い、上田清司埼玉県知事から、藺田氏に表彰状と賞金、記念品が贈られました。



藺田稔氏御家族、上田知事、久喜市長との記念撮影

藺田氏からは、写真や動画を使用し、市街地に残る貴重な森である「ははその杜」を紹介していただきます。

また、表彰式の後には知事公館中庭において、今上天皇陛下御即位を記念した記念植樹を行い、上田知事と、藺田氏によりサカキ一本が植栽されました。



天皇陛下ご即位を記念した植樹

四 終わりに

県では本多静六賞の表彰を通じて、博士を顕彰するとともに、緑と共生する社会づくりに取り組んでいきます。

引き続き皆様の御理解・御支援をお願いいたします。

青春は

本多静六博士と共に

久喜市 小林 登茂子

二〇一九年十一月七日、久喜市事業「本多静六博士ゆかりの地訪問」に参加しました。

二十代の前半の七年間職場が日比谷公園の近くにあったので、この中を通して通勤していました。有楽門から入り第一花壇の脇を通り大噴水と小音楽堂の間を通って霞門を目指します。コースはその日の気分で、新しい花を見つけるとその前も通ったりもしていました。第一花壇は季節ごとに花の植え替えがあり、新しく植えられた花にはネームプレートがついていました。私は初めて見る花や好きな花の名前をノートにメモして覚えしました。アルメリアやカッコウアザミを見ると悩み多かつた青春時代を思い出します。

この通勤コースでとりわけ好きだった場所は、雲形池の鶴の噴水です。悩みがあつて心が沈んでいた時は、遠回りして見に行きました。冬になると、噴水の水が凍って鶴全体が水で覆われてしまいます。

赤い傘

(略)

四隅からのライトに浮かび上がる噴水は鶴が翼を広げ 首を真上に伸ばし 嘴から 水を噴き上げようとして 噴き上げた水しぶきの形のまま 凍りついている

(略)

天を仰いで伸ばした細い首には最後の一滴までも噴き上げようと 押し上げられたしずくが 流れしたたり 涙のように いくすじも凍りついている

(氷に閉じ込められた鶴は

飛べない 鳴けない 歌えない)

女は そっと離れて

自分の赤い傘を カチツと開いた

凍りついて身動きできない鶴を

女の自立に重ねて書いた詩です。

訪問の日は公園内を「緑と水の市民カレッジ」職員の説明を受けながら見学しました。戦時中銅製の物は溶かされて大砲の弾にされたのですが、この鶴はどなたかが大切にかくまって生き延びたという解説がありました。今回参加し



公園内説明の様子

た事で、半世紀前と変わらぬ姿に出会えたばかりでなく鶴の秘められた生い立ちを知り、この優雅な姿はいつの時代でも熱烈なファンがいたことを知りました。

通勤していた頃は本多静六博士の名前を知らありませんでしたが、日比谷見附跡は飛び込みを防ぐため石垣の真下に築山を築いて噴水などを配したことや首かけイチヨウのエピソードを聞いてみると、私の青春は博士の温かい心に守られていたのだと、改めて思い知らされました。

明治神宮の杜を訪ねて

久喜市
中島利明

十一月七日、秋の一日を「本多静六博士ゆかりの地訪問」の研修会に参加させていただき有意義な一日を過ごす事が出来ました。

市役所をバスで出発し、車中で本多静六博士について読み合わせするなか最初の訪問地である日本初の洋風公園である日比谷公園を訪れ職員の方の案内で公園を見学し様々なことを学びました。

次に明治神宮に向かいましたが、バスの駐車場の都合により博士ゆかりの大クスの木が両側に植樹された大鳥居からは、入れませんでした。が車内から見る事が出来ました。

このクスの木は、明治神宮の杜を計画した博士の出身地の青年団により、運ばれて植樹、又一方は親戚により植樹されたそうです。



担当者の説明

明治神宮の杜は、約七十ヘクタールの広さで井伊家別邸や当時の陸軍の練兵場があり計画が始まったそうです。

博士は、明治神宮の杜建設計画の時から事業にかわり百年先を見据えた森造りにする事を実行しようとし「天然更新」する様大正五年から全国より十万本の献木、十一万人余りの奉仕活動により、大正九年に現在の明治神宮の杜へと続く作業が完成したとのことです。

神宮の杜を職員の方の案内で見学してきましたが、よく木々の間を見ると枯れて倒れた木、折れて倒れた木、等々数多く見ることが出来る、何故か山の古くからの様子に似ていました。地面を見ると小さな木々が育っていました。これが森の「天然更新」なのでしょう。

私も現在は旧栗橋町の中川河敷において本多静六博士を顕彰する森づくりで植樹した木を守るために地元の「NPO」を通して草刈りや、剪定作業を行っています。百年後が楽しみです。



「信州花フェス」で本多博士の功績を紹介

本多静六博士を顕彰する会 渋谷 克美

■ランドスケープ遺産フォーラム

「第三十六回全国都市緑化信州フェア」（主催・長野県・松本市他）の併催事業として、令和元年六月四日、長野県松本平広域公園やまびこドームにおいて、（公財）日本造園学会中部支部等主催による「ランドスケープ遺産フォーラム」が開催されました。



長野県内での本多博士の業績を紹介する筆者

この催しは、「未来に遺したい、貴重な信州の美しい風景（ランドスケープ）の他、日本の公園の父とも呼ばれ、長野県内の公園づくりのきっかけを創った『本多静六』博士について識者が語る」という趣旨で開かれたもので、フォーラムには、立教大学観光学部教授の小野良平先生をはじめ、信州大学農学部教授の佐々木邦博先生のほか、博士の出身地を代表して筆者が出演したほか、信州大学農学部准教授の上原三知先生が司会を務められました。

■ランドスケープとは

フォーラムでは話題提供ということで、初めに小野先生から「ランドスケープ遺産とは」というテーマで講演があり、松本市内の国宝松本城や旧開智学校の事例を中心に、文化財との関係や「ランドスケープ遺産」についての考え方が示されました。

その中で小野先生は、①意図をもってデザインされたもの②庭園、公園、並木道など、③生活・生業・信仰等により形成されたもの④街並み、田園、寺社参道など、⑤時代・文化の中で価値付けられたもの⑥名所、国立公園などと三つに分類されました。

こうした中、更に本多静六の業績にも触れられ、「本多博士は身近な都市公園から国立公園まで区別なく、広い分野で活躍していた」と評価されました。結びに「ランドスケープ遺産の活用」として、①目でみえる総合的な環境↓生活環境の保全。②地域資源の把握↓まちづくり、観光。③Invent（見つける）楽しさ↓地域活動のきっかけに、を提言されました。

■長野県内での本多の業績紹介

話題提供者の二人目に登壇した筆者は、「日本の公園の父 本多静六」をテーマに、I略歴、II公園設計と地域振興策、III本多静六記念館の三つの項目について発表しました。特にIIでは、長野県内の小諸城址懐古園と須坂市の臥竜公園を事例として取り上げ、公園設計のポリシーである「独立自強

と健康第一主義」と、具体的な設計の手法について述べました。

フォーラム終了後、複数の方から大変興味深い話だったと好評をいただきました。

三人目に登壇した佐々木先生は、日本造園修景協会長野県支部長でもあり、長野県内における代表的なランドスケープ遺産の具体的な内容、魅力等についてご紹介されました。

以上三人から各二十分程度の発表の後、司会者を中心に出演者による対談方式で話が展開されましたが、ここでも話題の中心は本多博士の公園設計や地域振興に関する考え方に多くの時間が費やされました。

終盤は参加者からのご意見、ご質問ということで、最初に、会場を訪れていた須坂市副市長の中澤氏から、臥竜公園を中心とした今後のまちづくりの取り組みなどについてご意見がありました。また、埼玉県から訪れたという男性からは、筆者宛に「本多静六が公園設計でイメージした都市とは具体的にどういったものか」というご質問等もいただきました。

午前十時から始まったフォーラム

ムは予定通りほぼ正午に終了し、ご参加を頂いた百数十名の方は満足した様子で会場を後にされました。

■発表のきっかけは青木村長

今回のフォーラム出演については、直接的には主催者である一般財団法人日本造園修景協会長野県



パネルディスカッションの様子
左から立教大学小野教授、筆者、信州大学佐々木教授

支部の役員の方からのお誘いでしたが、きっかけは旧菖蒲町の助役を務められたこともある長野県青木村の北村村長様からのご推薦があったことによります。北村村長は菖蒲町時代にも本多静六顕彰事業にご尽力を頂いた方であり、改めて感謝申し上げます。

私事ですが、今年度から顕彰する会の役員としてお世話になることになりました。今後も日本全国で活躍した本多博士の偉業について、本通信を通じて情報発信して参りたいと考えております。



やまびこドーム内でのパネル展示の様子

本多博士の足跡を遺す「気仙沼三陸地震ケヤキ」

本多静六博士を顕彰する会 渋谷 克美

■避難場所の目印に植えたケヤキ

平成二十七年（二〇一五）の十月頃、当時久喜市菖蒲総合支所の総務管理課に勤務していた私のもとに、都内在住の樹木医石井誠治氏から、「気仙沼三陸地震ケヤキ」について電話で問い合わせがありました。文化財保護課のときに「本多静六記念館」の整備を担当していたことから私に電話が回ってきたものです。

質問の主旨は「宮城県気仙沼市に本多静六が津波の際に避難すべき場所の目印にとケヤキを植える



平地より5、6メートル高い所に植えられたケヤキ

よう指導したという話があるが、「ご存知か」というものでした。初めて聞いた話なので存じ上げない旨を伝えその場は終わりました。後日、石井氏からご自身の著書と共に、石井氏が調査されたケヤキの写真が送られてきました。機会があれば調べて見たいと思っておりましたが仕事に追われ、そのままとなっていました。

■地元では認識されず

翌年（平成二十八年）七月、写真の存在を思い出した私は、このケヤキは地元でも認識されているものなのか気になり、気仙沼市の危機管理課にメールで写真を送り問い合わせました。回答は「昭和八年の三陸津波後に防潮林が整備されたところまでは確認できたが、その際にケヤキを避難場所に植樹したかは分からない。場所についても判断材料が乏しく確認できない」というものでした。

■震災遺構を訪ねて

平成三十一年(二〇一九)四月、市役所を定年退職した私は、学童保育の事務局に再就職しました。そして最初の連休を利用して東北地方を巡りました。東日本大震災後初めての東北訪問であったこと、学童保育という児童の安全を最も重視しなければならぬ立場になったことから、テレビや新聞等で紹介された震災遺構にも関心が向いていました。

七十四人の児童が死亡・行方不明となった石巻市立大川小学校跡地も目的地の一つでしたが、「気仙沼市東日本大震災遺構 伝承館」(宮城県気仙沼市波路瀬向九一一)、つまり震災後に津波で廃校となった旧宮城県立向洋高等学校も見学



旧宮城県立向洋高校校舎(中央奥)とケヤキ(写真左奥)

したい施設でした。訪れたのは四月二十八日。連休中ということもあって、施設には大勢の見学者が訪れていました。

伝承館は海から数百メートル離れた平地にあり、周りには遮るものもなく、津波が来れば大きな被害が出ることは素人目にも分かります。

幸い同校での人的被害はなかったとのことでしたが、施設内のスクリーンに映し出された津波の映像は想像を絶するものでした。実際、廃校となった校舎の至るところに津波の爪痕が遺されています。圧巻は三階の教室にあった自動車です。津波で押し流されてきた車がそのまま展示資料となっており、凄まじい津波被害の状況を目の当たりにすることができました。

帰り際、念のため持参したケヤキの写真が館長に見て頂いたところ、写真の背後に近くにある農協の建物が写っていたことがわかりました。外の駐車場まで一緒に出て来て頂き、この付近だろうとの所見をいただいたものの、問題のケヤキはもろろん、場所の特定までには至りませんでした。

■写真を頼りに目的地を発見

伝承館を辞去した私は、写真と農協の目印を頼りに、三十分ほどあたりを車で回ってみることにしました。そして、運よく写真にあるケヤキの木を遂に発見することができました。伝承館からの直線距離はわずか二〇〇メートル程度でした。ケヤキの木は平地より五、六メートル高い場所にあり、その存在を知っていれば目印にもなるものでした。

幸いにも、ケヤキの木の直ぐ側にお住いの畠山さんご夫妻にもお会いすることもできました。お話を伺ったところ、残念ながらケヤキが植えられた経緯や本多静六の名前は聞いたことがないとのことでしたが、今回の大津波の際にも、本多が指導して植えたと思われるケヤキの木は津波の被害は受けなかったとのことでした。



ケヤキの側にお住いの畠山ご夫妻

ケヤキの木の直ぐ下にあった畠山さんの家屋は津波の被害に遭ったようですが、現在はケヤキの地面の高さと同じ位に嵩上げして新居を構えておられました。ご主人がおっしゃった「地名が波路(はじ)、波のみちと書くくらいだから、津波が来やすい場所なんだよ」という言葉が印象的でした。

因みにこの地区の正式な字名は、気仙沼市波路上牧(はじかみまぎ)というそうです。

時間的な制約から、他の方からの聞き取りはできませんでしたが、このケヤキが、本当に本多静六の指導のもとに植えられたものであれば、改めてその高い専門性に敬服するばかりです。

■本多が調査した昭和三陸地震

東日本大震災による津波以外にも、三陸地方は、【明治三陸地震】「明治二十九年(一八九六)六月十五日」推定地震規模マグニチュード八・二(八・五)と【昭和三陸地震】「昭和八年(一九三三)三月三日」推定地震規模マグニチュード八・一の二度にわたって大津波に襲われています。本多静六は、昭和三陸地震の際



校舎3階の教室まで押し流された自動車



津波が学校を襲った時の様子

に、調査員として出向き津波の被害を少しでも軽減するため、防潮流の造成を提案したといえます。この高台に植えられたケヤキが本多の指導によるものであったなら、この調査の際の副産物であった可能性もあります。機会があれば、更に詳しい現地調査を行いたいと思っています。今後も全国各地に残る本多静六の足跡を訪ねながら、その功績を広く紹介していきたいと強く思った次第です。

九十九谷展望公園 を見学して

本多静六博士を顕彰する会
高橋 常雄

本多静六博士を顕彰する会の本年度の役員研修会は、九十九谷展望公園です。

令和元年十月十八日朝八時に、参加役員を乗せたバスはアミーゴ前から一路、千葉県君津市にある鹿野山九十九谷展望公園に向けて出発しました。途中車内で資料に基づいて朗読による研修が行われ九十九谷展望公園についての基礎的な知識を身につけました。バスは順調に進み首都高速道、川崎浮島JCTから海ほたる道に入り東京湾を横断して十時頃四季の蔵サーブスエリアで休憩、約一時間弱で目的地に到着しました。

資料によれば白鳥峰・熊野峰・春日峰の三峰を総称して鹿野山と呼ぶそうで、その一角をなすのが九十九谷展望公園で、複雑な地形は何万年もかけて浸食されて出来た地形で展望公園付近の標高は三七九メートルとの事です。

私たちが訪れたのは日中でした

ので見られませんでした。季節により朝早くから日の出頃までと日没後は霧が谷間を覆い墨絵の世界を醸し出しているそうです。霧に覆われた谷間から各所に峰が浮かび上がり海原に島が点在するごとく見事な美しさだそうです。そしてこの景観は、君津市の次世代に伝えたい二十世紀の遺産及び、千葉県の眺望百景に登録されているそうです。



九十九谷展望公園にて記念写真

このことは、本多静六博士が昭和四年に鹿野山公園計画概要に著しています。

鹿野山と云う言葉が私の頭に刻

み込まれたのは、私が子育て時代にマザー牧場へ子供会旅行のときフェリーでバスごと渡り訪問したのが初めてで、その牧場は九十九谷展望公園から二十分ぐらいのところにあるとの事でした。君津市といえば、私の頭の中では昭和三十年頃までは遠浅の東京湾での潮干狩り、その後は大規模埋め立て地に大手製鉄メーカーが進出して鉄の町、それに関連した工業都市とあっていましたが、同じ君津市でも内陸のこの地帯でこの様な素晴らしい景観が見られるのは嬉しい限りです。

私は九十九谷展望台から見えるぐらゐの地方の森林の植生を考えてみました。最初の印象は埼玉の隣の県でありながら相当違うと思えました。埼玉の自然林は『国木田独歩の武蔵野』にあるように「櫛」や「柵」などの落葉広葉樹にアカマツが点在するイメージですが、千葉県では展望台やバスの車窓から見る限り、常緑広葉樹が圧倒的に多いように感じられました。樹種は良く解かりませんがクスノキやカシ類・スタジイ・タブノキ等の類ではないでしょうか。マツもありますが、クロマツが多いと感

じました。それに竹林が多いと思
っていました。今回もその印象
を強くしました。竹の種類は、私
が見た限り「ハチク」が多いと見
ました。モウソウチクは葉がやや
小ぶりで基部が太く、マダケは幹
が直立しているし林相のしなり具
合や葉がやや大きく見えたので、
私は「ハチク」と判断しました。

おおむね以上のような自己研修
を行っているうち、帰りの時間に
なりました。午後一時頃に浜金谷
の「波留菜亭」と云うレストラン
で昼食をとりました。レストラン
から東京湾フェリーの乗降ができ、
相對する鋸南町との間を約四十分
で結んでいるそうです。私たちが
食事をとった隣では台風被害を受
けたお店の修復作業が行われてお
りました。その他にも、屋根をプ
ルーシートで覆っている民家が多
数みられました。

次に東京湾観音に寄りました。
この観音様は、世界平和と戦没者
の供養を目的に高さ五十六メー
トルで、材木商で財を成した「宇佐
美政衛氏」が建立し内部をラセン
階段で最上部まで登れるようにな
っています。役員が全員最上部ま
で登ったのは見事であります。私

も少々きつかったが登りきり東京
湾を眺め、何となく満ち足りた気
分になりました。これが観音様の
功德と云うものでしょうか。



東京湾観音にて

行くときは通り過ぎた「海ほと
る」のサービスイリアに寄り、私
はエレベーターで五階のデッキま
で登り東京湾の情景を充分堪能し、
羽田国際空港を離着陸する旅客機
を一機、又一機と、離陸した機は
何処へ行くのだろう、着陸する機
は何処から来たのかと思いをはせ
機種を選別を試みたが、望遠鏡も
なく加えて現在の機は特徴が少な
く、アメリカのボーイング機と欧
州のエアバス機さえ見分ける事が
むずかしい。
三十年位以前は機影も特徴があ
りエンジンの数も二・三・四発と
ひとめで解ったが、現在の機はエ
アバス機A380の四発機は別に
すると全ての機が2エンジンと言

って良い位で見分けられない。四
発のボーイング747型機を上回
る乗客を乗せる事ができる同じボ
ーイング社製の777機でさえ2
エンジンである。日本の政府専用
機も777機になった事は燃料消
費の少なさと機体やエンジン・通
信機器の信頼度によるのだろう。
午後四時ごろ海ほたるサービス
エリアを出発してから午後六時前
出発地に着きました。天気予報に
よる雨もほとんど影響なく快適な
研修会でした。

会員を募集しています

本多静六博士を顕彰する会では、会の活動をさら
に充実させるため、一緒に活動していただく会員
の方を広く募集しています。また、当会の趣旨にご賛
同いただける団体会員の皆さんも募集しています。

- 入会受付…随時
- 年会費…個人会員1,000円
 団体会員5,000円
- 問合せ…本多静六博士を顕彰する会窓口

編集後記

日本人初の公園デザイナーと
呼ばれる人がいます。名は長岡
安平(ながおかやすへい)一八四
二〜一九二五。日本の造園家・作
庭家。また「祖庭」の名をもつ茶
人でもあります。明治初期から
大正にかけて東京府の公園係長
などとして活躍し、数々の名園
を生み出しました。明治年代か
ら大正初期に至る間の造園技術
の第一人者、また公園行政官の
パイオニアとされています。全
国各地の公園の発展にも寄与
し、四十数ヶ所に及んでいます。
この人が街路樹にイチヨウ(公
孫樹・銀杏)を多く植えるように
したとのこと。大正十二年
の関東大震災により街路樹が六
割以上焼失してしまい防災面
でも必要とイチヨウを指定しまし
た。イチヨウは葉が厚くて水分
が多いので火に強い木との理由
だからだそうです。明治三十年
に設置の公園改良取調委員会の
元、設置予定の日比谷公園の設
計案の作成にあたっていました
が、結局本多静六らの設計に
よって一九〇三年に開園となり
ました。本多博士と共に尊敬で
きる人物です。

【編集発行】

本多静六博士を顕彰する会 (窓口)
久喜市役所企画政策課
〒346-8501 埼玉県久喜市下早見85-13
電話 0480122111(代)
0480185111(代)
久喜市萱浦総合支所総務管理課
電話 0480185111(代)